

子ども、父母参加の学校づくり

子ども論議を重ねることで共同が深まる

福井雅英

本年度提出されたレポートは以下の4本（発表順）で、参加者は15名であった。それぞれの報告内容を概観し、討議の特徴を紹介するとともに、来年度に向けた課題を提起することとしたい。

①学校づくりを支える分会の力く稚内の今年度を振り返って

佐野雅嗣（稚内南小）

②学校のあり方を問い直して

安河内 敏（北星学園余市高等学校）

③「北海道学」（学校設定科目）の取り組みについて

く湧別町郷土館（JRY）の学芸員と共同して授業をどうするか

渡来和夫（湧別高校）

④子ども達の健やかな成長・発達を保障するネットワーク

末村哉子・八木博（稚内東小）

レポートと討論の概要

佐野レポートは、子育て運動を積み上げてきた稚内においても、事件や事故などいくつかの困難が重なったこと、そのなかでも、「子どもの心をくみとってどう指導するか」という観点で実践を見直し、愚痴や弱音を出し合うところから課題に迫っていくうえでの、分会など組合の役割を報告した。職場で力を合わせるための「隙間の力」としての分会活動の意義が述べられた。分会会議で子どもの実態について発表しそれを共有する努力をしている。また、課題が担任や学年任せになっていないかと振り返って教職員集団づくりを進めた。振り返りの中で、「高圧的指導、冷たい指導になっていないか」「子どもの心を受けとめる指導になっているか」「子どもの心に響く指導になっているか」などが問い直され、「信頼される学校づくり」への実践が追求されている様子が報告された。報告の中で、いろんなことが起こっても、「でも、子どもたちは明日も学校に来る」という言葉が何度か出され、「子ども第一」で考える視点を示すものとして印象的であった。

安河内レポートは、全国から多様な生徒を受け入れている北

星余市高校で、様々な問題に直面しながら、「学校のあり方を問い直し」つつ創造的な実践を展開している取り組みの報告であった。不登校・引きこもりの経験者や非行・暴力などの問題行動を示す生徒など、文字通り多様な生徒が出会う場であり、当然困難な問題もあるが、生徒の力を借りて「多様な子が共存する母集団をつくる」ことの積極的な教育的意味が述べられた。

個別の生徒にとっては、異文化との遭遇とでも言いうるほどの体験になるわけである。「ごちゃ混ぜ教育」「アメーバ集団」などの言葉でその特徴が述べられ、それだけにダイナミックな行事創造や異年齢と一緒に暮らす下宿生活などを経験し、「混乱状況の中で子ども自身も頭を使う」状態をつくり出している。生徒同士が関わり合うことを通して「おせっかいを生み出す」が意図されているという。それは生徒を生活の中で理解し、生活主体として尊重することになっている。「学校は単位を取ったり、成績を取るだけの場所ではない」という言葉には「学校のあり方」を問い直す基本的な視点が示されていると思う。生徒は卒業生に贈る言葉として、「先輩は俺たちの最高の先生だった」と述べているが、多様な生徒が関わり合う密度の濃さとその実践的意義がよく示されている。

渡来レポートは、教育内容の創造を通して地域に根ざす学校をつくる興味深い道筋が示された。道教委なども推奨する「学

校設定科目」を、湧別高校では「北海道学」と設定し、地元地域にこだわった学習活動を追求している。その際、町の郷土館と連携し、学芸員の専門力量を生かして成果を生み出している。

湧別高校は連携型の中高一貫校で、「地域の子どもは地域で育てる」という理念を掲げ、「地域を知るための地域学習の連携」を進めるとしているその条件を生かした実践である。「受験競争から自由な就職組」の生徒を対象にした科目であり、中でも面白いのは「身体を使って学ぶフィールドワーク」である。学芸員から「フィールドワークで大事なのは感じること>だ」という指摘を受け、「煉瓦を触つたらあたたかかった」などという生徒の発言にも着目するようになったと言う。これなど、学習対象と自分との距離や関係が変わったことを示す象徴的な発言だと見ることもできる。フィールドワークでは、五鹿山周辺、煉瓦建物などの他、囚人道路、鎖塚、定紋トンネル、空襲跡、さらには石器づくりなども含まれている。学校と地域をつなぐのに、地域に残された実物に触れ、歴史や文化を介在させて教科横断的な学びをつくり出しているのである。小学校などで追求された総合学習をイメージさせる学習であり、「行き当たりばったり」の苦労があると述べたが、多忙な中で外部とのつながりを造りながら教材開発を進める大変さはあるが、マニュアルも教科書もない中で創造的な実践を展開する面白さや楽しさが報告された。その意義や可能性は、生徒の学習感想に「卒

業後も地域に残って郷土研究サークルが出来たら…」と述べているのによく示されている。

末村・八木レポートは、生活困難や貧困が広がる地域の中で、学校だけでは解決できない課題に、地域の社会資源をつなぎ活用しながら取り組んでいる様子が報告された。子どもの困難の背後に、親自身の病気や発達障害など課題が重複していることが多いと報告された。2008年12月に設立された「東地区子育て支援ネットワーク」は、定例会議を積み上げ、10月で38回を迎えている。参加者は、当該地区の3校の管理職、事務局校の生徒指導部長、民生児童委員、主任児童委員、S.S.Mの12名で構成され、会議では個別の子どものケースを取り上げて深く検討し、多様な方策が追求されている。父子家庭の子どもの父親の勤務先の上司などとの連携が模索された例も報告されたように、子どもを支える地域の社会資源について、既存の機関のつながりを辿りながら新しい力を発掘しようとしているのである。個別ケースを検討し継続的に観察を続けて問題を共有しようとしている。このようなカンファレンスでは、具体的な形で実践や支援内容が出し合われ、教師の視点も広がり変化するだろうし、学校への地域の信頼を自然な姿で作ることになるだろうと思われる。このような実践を生み出す土壌には、「宗谷の教育合意運動」の分厚い蓄積がある。子どもの困難が増幅する

一方、上からの教育改革による「不信と対立」の構図が持ち込まれている中で、これと対抗しながら子どもを支える地域における共同をひろげ、今の時代の新たな教育合意運動の展開だと位置付けられる。

全体討論では、子どもの様子を語り合うことを通して子どもを多面的に見ようとすする教職員集団づくりの努力が、それぞれの状況を踏まえて交流された。民生委員やPTA役員などとも子ども論議を重ねることで共同が深まること、その可能性と意義が論議された。評価社会と多忙化を乗り越え、失敗体験を活かせる共同のあり方にも論及され、「子ども、父母参加の学校づくり」のイメージが豊かになった。ただ、レポート数が「本であり、地域的にも広がりがあったとは言えないので、次年度以降、各地で展開されている多様な実践をレポート報告する参加者を組織することが課題である。